

## 要旨

### さっぽろレインボープライドのエスノグラフィー -連帯が拡大するプライドパレードと主催団体の今日的課題-

倉本 優

キーワード：性的少数者（LGBTQ+）、プライドパレード、アセンブリ、クィア・コミュニティ、クィア・フェミニズム

本論の目的は、性的少数者に対する差別解消を求め、また当事者の生や存在を祝福する「プライドパレード」における実践に注目し、政治的行為の1つとしてのアセンブリ概念の深化、そしてかつてのプライドパレードにおける人類学で扱われてこなかった男女間の格差に光を照らすことで、フェミニズムの観点から性的少数者に関する人類学を発展させることである。

第1章ではまず、本論の目的について説明する。続いて、本論の動機として、レズビアンという筆者の当事者性と、現代社会の情勢を提示する。その後、本論の構成を述べる。

第2章では、事前調査として本論において重要なキーワードである性的少数者（LGBTQ+）とプライドパレードについて説明を行う。キーワードの定義のほか、プライドパレードに関しては、日本における開催の経緯についても述べる。

第3章では、先行研究のレビューとして、プライドパレードの文化人類学的研究の分析と、重要な分析概念であるアセンブリ、プレカリティ、クィア・フェミニズムについて述べる。また、フィールドワークを行った札幌という土地でプライドパレードが開催される以前の性的少数者の実践にも言及し、さっぽろレインボープライドの歴史的な位置づけを試みる。

第4章では、調査概要を説明する。加えて、本論が調査協力者のアウティングとなることがあれば、その被害者の生命に直結するような不利益をもたらす恐れがある。そのため、参与観察やインタビュー調査における倫理安全上の注意点及び本論の取り扱いについて述べる。

第5章では、調査結果を細分化して提示する。まず、実行委員の当事者性と入会の経緯、実行委員の当事者性と入会の経緯を分析する。ここでは入会前に当事者性を見出したケースとして、性的少数者当事者である実行委員へのインタビュー調査を行った結果を示す。

続いて、活動の中で当事者性を見出したケースとして、実行委員会に入会後に性的少数者当事者としての意識を持つようになった実行委員へのインタビュー調査及び、筆者の経験を示す。最後に、アライのケースとして、性的少数者非当事者である実行委員へのインタビュー調査の結果を示す。

続いて、実行委員の実情として、実行委員会の今日的課題を参与観察とインタビュー調査の結果から提示する。まず、プライドパレードの大規模化による実行委員への負担について論じる。続いて、実行委員会内やプライドパレード当日におけるジェンダーギャップについて、参与観察に加え日本各地や札幌の性的少数者の活動の経緯に照らし合わせて分析する。

最後にさっぽろレインボープライド当日の様子について論じる。ここでは、まずさっぽろレインボープライドをはじめとした多くの日本のプライドパレードにおいて重視されているパレード行進について論じる。続いて、パレード行進を除いたさっぽろレインボープライドの様子を、主に歩行者天国会場に焦点を当てて論じる。

続いて、提示した事例をもとに考察を行う。この際には研究の目的に際して、さっぽろレインボープライドを具体例とした今日の日本におけるプライドパレードの特徴と、クィア・コミュニティとしての実行委員会の特徴とに分けて論じる。

結論では、本論をまとめ、その成果と課題を述べる。ここでは従来のアセンブリ概念とプライドパレードの相違点を改めて提示し、性的少数者の連帯の様相を述べる。続いて、プライドパレードにおける男性中心主義が解体される一方で、その温存と捉えられる事例も存在していることを論じる。

以上のように、本論はレズビアンという性的少数者、女性という被差別要素を持つ筆者の参与観察及び、インタビュー調査に協力いただいた様々な被差別要素や特権性を持つ人々による連帯と差別や格差への抵抗の実践を示すものである。そして、プライドパレードというアセンブリを含む政治形式と、クィア・フェミニズムの具体的な実践を提示するものである。実践の提示とその分析を行うことで、現在も差別に苛まれながらも生存を続ける性的少数者、そして女性へのエンパワメントになることを望む。